ぐるぐるする。べとべとする。いらいらする。
きもちいい。きもちよくない。わかんない。
あたしには、もうなんにもないの。

◆

――彼女は『ミーア』である。

はあ、と熱い吐息を舌先から零すと、男が笑った。彼女の下ではギシギシと嫌な音を立ててベッドが軋んでいて、これ以上揺するなと抗議している。だが男は彼女に腰を打ち付けることを止めはしないし、彼女もそれを止めようとはしなかった。鞭で打たれた背中がひどく痛んでいたような気がしたけれど、大分感覚の鈍った体は正しくその痛みを伝えない。自分が感じているのが痛みなのか快感なのかさえ、彼女にはもはやよくわからなかった。だが、単調にあえぐ様子に気付いた男は、その赤黒い塊を彼女の中から抜くと、むくつけき手で彼女の髪の毛を引っ掴んだ。そして、鋭い痛みに歪んだ彼女の顔など知らぬとでも言うように、「おい」と低い声で呼びかけた。
「ミーア、やる気あんのか」
彼女は答えなかった。どんな答えをしようが、どうせ今よりひどい目に遭うだけだ。それなら口を開くだけ無駄である。潰されてろくに声の出ない喉で必死に答える必要もないと彼女は思っていた。それにそもそも、その名前は彼女の名前ではない――その名前は、彼女の『商品名』に過ぎないのだ。とは言え、本当の名前は、もう思い出せないけれど。大事な人につけてもらったはずなのに。
案の定男は、答えない彼女に腹を立てたらしかった。短気な男だ、と彼女は思う。前の人の方が良かったな。本物のサディストの方が、よほど楽だ。何がやっていいことで、何がやっちゃいけないことなのかわかっているから。この男みたいに、うっかり彼女を殺してしまうこともなかった。彼女がぼんやりそんなことを考えていると、男の手で無理矢理仰向けにされて、いきなり顔面を殴りつけられた。口を半開きにしていたせいで、口の中が切れる。鼻に加えて、歯も何本か折れたようだった、喉の奥に血が溜まって錆の味が広がる。彼女は、自分に味覚がまだ残っていることに驚いた――とっくの昔に、何の味も感じなくなっていたと思っていたのに。
男が何かを叫んだ。激昂しすぎていたせいで呂律が回っておらず聞き取ることはできなかったが、おそらく、自分に対する罵詈雑言の類だろうと彼女は察する。しかし、だからどうだと言うのだ。もうどうだっていい。だってこんなの、わたしじゃない。名前もわからない。ミーアというただの商品。わたしは『ミーア』。わたしは人間じゃない。人間じゃないから、わたしなんていない。商品は『わたし』について考えたりしない。

もう一発、顔に拳が飛んでくる。今度こそ、正真正銘、鼻が折れた。やっぱり、前の人の方が良かった。もう顔も名前も思い出せない人だけど。
何度も何度も殴られて、歯がついに全部折れる。男はそれで気が済んだらしく、潰れた彼女の口を無理矢理こじ開けると、喉に溜まっていた血と歯を全て吐き出させてから、己の男根を彼女の口腔へねじ込んだ。
ああ、なんだ。彼女はどこか遠いところで、その肉塊をしゃぶる。
やっぱり、味なんてしないじゃないか。

――彼女は『ミーア』である。

女と一体化した視界で、彼女はぼんやりと、目の前の男が四つに分断されて地面に落ちるのを見ていた。彼女の覚えた全ての技は、人を殺すためだけにある。女が甲高い声で笑って、男の四分の一を踏みつけた。私の邪魔をするからこんなことになるのよ、と言って、既に死んでいるはずの男をさらに細切れにする。すっかりミンチと化した男の死体の前で、女がうっとりと言った。「ミーアちゃん、あなたって強いのね――また一緒にお仕事しましょうね」女の言葉に、彼女はうん、と思念で頷く。彼女には肯定しか許されていない。そう言う商品だからだ。
一体化を解いてもらって、女の指示で、男の死体に油を撒く。どぼどぼと流れる油は、セックスの時に使うローションになんとなく似ていた。「撒き終わったよ」にっこり笑ってそう言うと、女が満足げにジッポを取り出し、火を点けてミンチ肉の上に放り投げた。燃え盛る火と血の中に独り立って、彼女は動かなかった。スカートに火が燃え移ったけれど、彼女は動かない。動いてはいけない、そう言う契約だからだ。
「いいわ、ミーアちゃん……。綺麗な女の子が生きたまま火炙りにされるのって、とっても素敵よ！」
女の言葉に、彼女はますます笑みを深めた。「ありがとう！」彼女は満面の笑みで、火に飲まれる。女の姿が炎の向こうに見えなくなって、それでも彼女は笑っていた。痛くもなければ、熱くもない。褐色の肌が、青い炎になめられていく。感覚がなくなったのはいつからだったかな？　彼女は髪の毛から伝ってきた炎に顔を飲まれ、膝をついた。しかし、自分は立っていなければならないのだ。彼女は、炭化し始めた足で、無理矢理に立ち上がる。立たなければ――でも、何のためにだろう。彼女は不意に疑問を抱いた。だが、その疑問は、彼女の中にある、何か分厚くて脆いものに覆われてわからなくなってしまった。
結局、本能が擬態を解くほど燃えて朽ちようが、彼女がその疑問を思い出すことはできなかった。

――彼女は、『商品（ミーア）』である。

「ミーア」

「はい！」
彼女は笑う。
「ミーアちゃん」
「はい！」
彼女は笑う。
「ミーア、てめえ！」
「ごめんなさい！」
彼女は笑う。
「えらいよ、ミーア」
「ありがとう！」
彼女は笑う。
「ミーア、これからも俺の金づるでいてくれよ――なあ？」
「うん、エンリケ！」
彼女は、笑う。

「うちのミーアは、お客様のどんな願いだって笑顔で叶えてくれますよ！　そういう商品なんです――ええ、殺したって一日置いたら元に戻るんです！　お客様が宵闇の者なら、重魂することだってできますよ！　ええ、返す時は殺して霧散化させてくだされば結構です、ええ、大丈夫です、ミーアがあなたに牙を剥くことなんて絶対にありません――そう、そうなんですよ、ミーアはうちの中でも最高の商品なんです――ああ、確かに、うちは他にも商品をたくさん置いておりますけれども、やはり、外見、従順さ、性能、あらゆる点においてミーアが一番ですね――そうなんです、ミーアはあらゆることに対応できるよう教育していますから、はい、保証します、きっとあなたをご満足させられますよ！　ええ、ええ、はい！　はい、ご契約ありがとうございます！」
彼女は、ミーア・ヒミネス。エンリケ・ヒミネスの業魂であり、『あらゆること』に貸し出される、『商品』である。

◆

――あたしはしなものです。しなものなので、もんくはいいません。なまえもありません。あたまがいいといやがるひともいるので、あたしはばかなむすめでいます。ばかなので、なにをされてもわらっています。そういうしなものなのです。おきゃくさんは、あたしのことを、みーあ、とよびます。あたしはにんげんじゃないので、ひとごろしとか、えっちなことや、いたいことを、みんなへいきでします。あたしはしなものだからです。いちど、ひとりのひとから、みーあというなまえじゃなくて、むかしなのっていたはずのなまえをきかれましたが、あたしは、しなものなので、そんななまえはありません。エンリケがそういったんです。エンリケが、みーあ、おまえはもう、なまえなん

てなのらなくていいんだって、だからなまえなんてなくなったんだっていったんです。だからあたしになまえはないんです。あたしも、しなものになまえがあるのはへんだとおもいます。だって、なまえがあるってことは、なまえをつけられてるってことは、むかしだれかにあいされたってことなんですから。これは、ダミアンがいってました。ダミアンは、あたしをただでもっていこうとして、エンリケにころされました。ころしたのはあたしです。エンリケがやれっていったので、ころしました。ダミアンはさいごまでわらっていました。ないていたのかもしれません。わかりません。あたしはにんげんではないので、ダミアンがわらっていたのか、ないていたのか、わからないのです。エンリケにきいたら、ダミアンは、おこっていたといいました。おまえがダミアンをころしたからおこっていたんだといっていました。あたしには、これも、よくわかりませんでした。けれど、あたしをつかおうとするおきゃくさんにはむかう、はむかうっていうのは、きずつけるとか、そういういみらしいのですが、こうすると、おきゃくさんはおこるらしいのです。だからあたしは、おきゃくさんにさからいません。

あたしはしなものです。しなものなんです。

◆

……雨の日は、自転車が使えないから困るなあ。カレンはそんなことを思いながら、食材で膨らんだビニール袋を握り直した。スーパーのモーニングセールに滑り込んだカレンは、じめじめとした暑さと湿度に顔をしかめながら入江の街を歩いていた。華羅市は、六月も終わってしばらく経とうとしているのに、未だ梅雨も明けず雨が降り続いている。これは彼女にとって、つくづく頭の痛い問題であった。最近では車の免許を取ることも考えているのだが、いかんせん教習所に通う金が捻出できない。むむむ、とカレンは形のいい眉を寄せて悩む。サンダルの底が、ぱしゃりと水たまりを踏んだ。

庚の食玩、ほんとに売れないかな。カレンは気が付くと増えている押入れのケースを思い浮かべて溜息を吐いた。なぜかは知らないが、庚はとても食玩が好きだ。というか、ちまちましたもの全般が好きだ。しかも、どうやら収集癖があるらしく、放っておくと子供のように瞳を輝かせて食玩を箱買いしてくる。釘を刺しておいてもこっそり二つくらい買ってくる。正直頭の痛い問題であった。まあ、その分はしっかり稼いでいるので問題はないと言えばないし、本当は目くじらを立てるような問題ではないのだけれども。というか、カレンたちの生活費の六割は庚が稼いでいるので、その分に対してカレンがとやかく言うのは間違っているのだけれど。不器用過ぎるカレンでは内職など出来ないわけであるのだし。因みに、一度手伝った時は、開かない封筒と、カーネーションの色合いをした紙屑が出来た。流石の庚もその時ばかりは顔が引きつっていて、それ以来、やや生温い笑顔で「外で遊んできて大丈夫ですよ」と言うようになってしまった。勿論平謝りしたが、カレンの不器用さに対する彼の生温い笑顔は未だ拭えそうにない。

だからまあ、庚が自分の稼ぎの一部を遊興に回したって、問題はないのだ。ただ、それは、家計が厳しくない場合である。一ヶ月か二ヵ月収入が殆どなく、次の収入がいつあるのかわからないから死ぬ気で節約しなくてはならない、と、家計簿をつけている庚

自身が言っているような状況であっても、彼はたまに――いや新作が出れば必ず、コンプリートしようとしてしまうのだった。おかげで、次の収入が来るまで、全財産三百円で過ごしたことさえある。

それから、スペースの問題もあった。庚の食玩が最近増えすぎて、押入れから溢れているのである。いたるところに食玩が置いてあるのだ――少なくとも、庚の部屋は、そろそろ元の壁紙がわからなくなるようなレベルで、ケースに飾られた食玩群が積まれている。台所とダイニングはかろうじて二、三個で済んでいるが、これもいつ侵食されるやらわからない。定期的にカレンがキレて三分の一ほどずつゴミに出しているというのにこれである。どんなペースで買っているのか、最早想像するのが嫌であった。

正直カレンにはあのちまちました食玩の良さがまったくわからないし、端的に言うなら「邪魔」である。いっそ全部まとめてフリマに出してやろうかと何度思ったかわからない。カレンはそれほどあの食玩に悩まされていたし、庚もそれは一応察してはいるようだった。だからと言ってやめるわけではないのだが。

カレンは庚の部屋である和室を思い出して、また溜息を吐いた。だが彼女は、自分の中に、そんな庚を羨ましいと感じる心があるのも、自覚していた。あそこまで無我夢中に何かへのめり込んだことが、カレンにはない。料理は好きだが、我を忘れてしまうほどではないし、水泳は、現実逃避の側面が大きすぎた。カレンには何もないのだ――彼のように、何かあればいいと、そう思って、もう二十年が過ぎている。

……そうだ、これは、嫉妬だ。

ピンクのビニール傘を、雨粒が、ばらばらと叩く。そう、カレンが庚の収集癖を疎むのは、嫉妬のせいも多分に含まれていると彼女は知っていた。

自分から生まれたはずなのに、どうして、自分にはないものを持っているのだろう。そんな幼い嫉妬が、カレンの中には確かにある。

庚はかつて、ぼろぼろのカレンを救ってくれた。死からも、彼女の両親からも、そして、あの男、からも。彼は泣くカレンを抱きしめて、子供へするように背中を撫でながら、もう二度とあなたは泣かなくていい、と、これからはもう、どちらかが死ぬまで一緒にいてあげるから、ずっと守ってあげるから、と言ってくれたのだ。それが、当時のカレンにとってどれほどの救いだったか。彼は今でも、発作のように死にたいと叫ぶ彼女をなだめてくれる。彼がいなければカレンはとっくの昔に命を絶っていただろう。

カレンはとてもじゃないが、あんな風にはなれない。

だから、カレンにとって、そんな庚は、永遠に届かない星のようなものなのである。ああなりたい、彼みたいに強くなりたい、そう願うのに、逆立ちしたって太刀打ちできやしない。それが、彼女にとっての庚であった。

ないものねだりなのだ、結局。カレンは、自嘲を唇に乗せると、ずれてきたウエストポーチの位置を元に戻した。自分が庚になることはできないし、願望を抱くことすら馬鹿らしい。彼が自分のために生きてくれるというのなら、自分も彼のために生きよう、カレンに出来ることはそれだけだ。

カレンは重たい気分を払うこともできないまま、近道をしようと路地に入る。カレンは夏の暑さが苦手なのだ――何せ、夏はもう、チューブトップやTシャツにホットパン

ツと言う格好でなければ暑さでやられてしまうのである。今日は太陽がないのでまだマシだが、天気のいい日などは本当に、天日干しになってしまうのではないかとカレンはいつも思ってしまう。だから彼女は、できるだけさっさと帰って、夕飯を作ってしまいたいのだった――家に帰れば、少なくとも、扇風機はある。

路地に入ると、ビルに圧縮された風が、ごうと音を立てて吹いた。当然襲ってくる雨粒に、カレンは傘を前へ傾けると歩を速めた。勢い、サンダルに水が入って、カレンはうえ、と眉をしかめて足を止めると、下を見た。

直後、カレンは、背後から誰かにぶつかられて前に吹っ飛んでいた。彼女の手から離れたビニール傘が、風にあおられて路地の入口まで飛んでいく。一体何が起こったのかわからず、カレンは目を瞑ることもできないままうつ伏せでアスファルトに落ちた。顎と膝をすりむいて、カレンは呻く。視界の端では、買ったばかりの食材が、ビニール袋から飛び出ていた。ただし卵は無事であるようで、とりあえずそれを確認したカレンは安堵する。今日の戦果が砕け散りでもすれば、悲しみに暮れてしまうところであった。

「――ご、ごめんなさい！」

頭上から降ってきたのは、女の声であった。カレンは上半身を起こして彼女を見、それから、違和感を覚えて瞬きをした。褐色の肌に、ウェーブのかかった黒い髪、高い鼻に形の良い眉。南の海の色をした瞳は二重で大きく、吸い込まれそうに美しい。年齢は二十代の後半に差し掛かったところだろうか？　グラマラスな体を押し込めるように黒いドレスをまとった、美女と呼んで差支えのない女性がそこに立っていた。だが、しかし――カレンは眉をしかめる。なんだろう、この違和感は。この女性は、どうにも、何か、ずれていてはいけないものがずれているような気がするのだ――逆さまに回る時計のような違和感が、そこにはある。

「だいじょうぶ？」女性が手を差し伸べてくれる。彼女のしなやかな手首に巻いてあるチェーンが、しゃらりと鳴った。よく見れば、チェーンは彼女の手首から生えている。業魂だ、とカレンは気付いた。

「だ、大丈夫です。ありがとうございます」

カレンはその手を取って立ち上がりながら、やはりおかしい、と訝しげにその女性を見つめた。何かがおかしい、何がおかしいのかはわからないが、何かがおかしい、それだけはわかる。だが、そんな彼女の視線など知ってか知らずか、女性は、路地の入口まで小走りになって行って、カレンの傘を拾った。そう言えば、この女性は傘を持っていない。雨は、昨日の夜からずっと降り続けていると言うのに。

「あのね、あたし、もういかなくちゃいけなくて、だから、えっと……」

カレンに傘を手渡して、女性は怯えたように青い瞳を泳がせた。見れば、細い指が忙しなく、意味のない動きを繰り返している。

「ごめんなさい、おこってる？　えっと、あたし、あたし……」

そこでようやく、カレンは、自分が何も言わないから女性は怯えているのだと気が付いた。「ああ、ええと、いや、怒ってませんよ」傘に付いた水滴を払ってから――もうすっかり雨に濡れてしまっていたので、無駄と言えば無駄だったが――差し直して、女性に言う。「それより、あなたこそ大丈夫ですか？」

「うん、あたしはだいじょうぶ。今日も元気だよ！」
女性はそう言って、にっこり笑った。外見の年齢よりも、かなり幼く見える笑顔である。それに、些か、感情が見えない。この笑顔は、昔の自分が浮かべていたものに似ている、とカレンは少しだけ思った。
……やはり、奇妙だ。カレンはそう内心で首を傾げつつも、詮索することでもないだろうと口には出さないようにする。
「それなら良かっ――」「ミーア‼」
カレンの言葉を遮るように路地の向こうから叫び声が聞こえて、女性がびくりと飛び上がる。何事かとそちらを向くと、路地の出口に黒い乗用車が止められており、横に緑の髪をした男が立っていた。傘は蛍光イエローである。
凄いな、緑。カレンは、男の奇抜な髪色に面喰いつつ、「ミーア、さん？」と女性に問うた。女性は驚いたような顔でカレンを見て、それから、「うん」と頷いた。「あたしはミーアだよ」
そんなやり取りをしていると、業を煮やしたらしく、「ミーア！　何してんだ‼」と叫びながら男が近寄ってくる。近くで見た男は、痩せて魚面をしており、身に着けている黒縁の眼鏡と派手な柄のTシャツはあまり似合っていなかった。
「次の客が待ってんだ、散歩の時間くらい守れ！　このグズ！」
「ちょ、ちょっと」ミーアの元へ辿り着くなり声を荒げて拳を振り上げようとした男に、思わずカレンは口を挟んでいた。「この人だけが悪いわけじゃないんです、そう責めないであげてください」
「ああ？」
男がカレンの方を向いて、少女は恐怖を抱く。男の目が、あの時の――男に、似ていたからだ。口を挟むべきじゃなかったか、と思いながら、カレンはできるだけ男の目を見ないようにして、言葉を続ける。
「さっき、ここで私とぶつかったんです、それで、私のことを助けてくれていて、もしこの人が何かの約束に遅れたなら、そのせいなんです。だから、この人だけが悪いわけじゃなくて……」
段々と声が小さくなり、最後にはどう言えばいいのかわからなくなってカレンは唇を閉ざした。男は値踏みするようにそんな彼女をじろじろと見ていたが、しばらくしてから「なるほど」と言った。
「顎と膝をすりむいているということは、ミーアが君とぶつかったんだね。それも結構な勢いで」
「それは……まあ」
「じゃあやっぱり、ミーアが悪いんじゃないかな？　ミーアがちゃんと時間を考えて動いていれば、走ることもなかったし、君にぶつかることもなかった。そうだろう？」
「……」
カレンは、何を言うべきか迷った。だが男はその沈黙を肯定と受け取ったらしく、「まあ、ここで会ったのも何かの縁だ。これを渡しておくよ」と一枚の名刺を取り出した。カレンは傘を肩と首で挟み、それを両手で受け取って、じっと見てみる。白い紙はエン

ボス加工で装飾され、日本語と英語で、名前と職業、そして電話番号が書かれていた。
「……エンリケ・ヒミネス？」
「そう。人材斡旋業をしているんだ」
確かに、手のひらサイズの名刺にはそう書いてある。
「こっちのミーアもスタッフでね――今から仕事なんだ。だから怒ったのさ」
男――エンリケはそう言って、ミーアの肩に手を置いた。彼女は目に見えて怯えており、機嫌を伺うようにカレンへ目をやった。
「はあ……」
「君も、何か人手が足りないことがあれば相談に乗るよ」
そう言われても、カレンがもしそんな事態に陥っても、頼む金などない。カレンは、絶対こんなの頼むことなんてないだろうなあ、などと思いながら、「ありがとうございます」とだけ言って、名刺をポケットに入れた。
「それじゃあ、我々はこれで」
最早エンリケはこれ以上カレンに何か言わせるつもりはないようで、彼はミーアと共に背を向けると、車の方へ歩いていく。そのまま乗用車が走り去るのを見届けてから、カレンはようやく、そう言えば買ったものを地面に転がしたままだったと思い出したのであった。